



幻の恋

黄色い風船

春日信彦

自殺のニュース

シャムネコ、ミーシャは定刻の5時30分に拓也の唇をなめる。ミーシャを抱っこするとベッドから立ち上がりパジャマのまま書斎に向かう。デスクの前に立ちPCの起動スイッチを左手の人差し指でオン。部屋着に着替えるとキッチンでコーヒーの準備をする。いつものキリマンはお休み。昨日届いたブルマンをペーパーフィルターに大匙2杯入れる。電気湯沸しティーポットのお湯を少しずつ注ぐ。拓也はほんのり甘い幻想的な香りに酔いしれる。

コーヒーを書斎に運ぶとPCのニュースを確認する。いつもの暗いニュースが今日も顔を出している。*火星で核実験成功 *過労死裁判 *幼児虐待の増加 *臓器売買の激化 *女子大生の自殺

即座に自殺をクリック！S女子大学のJ・Yさんが、8月5日(火)、午後10時ごろ、自宅の寝室で遺体で発見された。死亡鑑定の結果、死因は多量の睡眠薬と判明。K教団の信者であるJ・Yさんはその施設で集団生活していたが、8月4日(月)両親に引き取られた。両親によると、教団に戻してほしい、神の子を産みたい、と涙を流して何度も訴えた。

神の子、あの患者と同じだ。大変なことになった。大学に行かなければ。プルルル・・・こんなときに。拓也は携帯に耳を当てる。「はい、研究室ですね」ドクターからの指示。拓也はタクシーを拾い大学へ向かった。一人の職員が校門前で数人の記者たちに囲まれていた。拓也は記者の引止めを振り切ると研究室に突進した。「ドクター！」拓也は息を切らせて叫ぶ。

「落ち着いてください。理事長からの連絡があるはずですよ」ドクターはコントローラーチェアでソファまでやってくると、拓也にソファに腰掛けるように手招きする。「他にも信者がいるんですか？」拓也は腰掛けると即座にたずねた。「います。現在、3件の搜索願が出ています」ドクターは最小限の情報を拓也に与えた。「3件も。さらに自殺ってことは？」拓也は自殺のスキャンダルを心配している。

「いや、病院で対応することになっています。あの子ども、今日入院させる予定だったのです」ドクターはゆっくり目を閉じる。「残念ですね・・・」拓也はドクターの心境をさっし言葉を呑んだ。「当大学の信者が何人いるかつかめていませんが、今のところ警察に任せる以外ありません」ドクターは立ち上がると小さなキッチンに向かう。

「そうだ、知り合いのコロンダ刑事に相談されては？」拓也も立ち上がりドクターの横に立つ。「もちろんです、手は打ってます。今回の事件も自殺と断定できませんからね」ドクターは眉間にしわを寄せる。「ところで、あの患者は大丈夫ですか？」更なる自殺を懸念した。「管理体制は万全です。きっと、治療して見せます」医者としての威厳のある態度を示した。

* 佳織と拓也の出会い *

自殺事件はマスコミに取り上げられ、大学に混乱をもたらした。もし、このまま混乱が続けば来年の入学志願者は激減する。どうすることもできない拓也はドクターからの連絡を待った。ドクターから連絡があったのは事件後3日経ってから。電話を受け、安部精神病院にタクシーを飛ばした。受付を通すと拓也はまっすぐドクターの研究室に向かった。また、自殺者が出たのではないかと驚いた拓也はノックもせず研究室に飛び込んだ。

「先生、あまり興奮しないでください」ドクターはいつものフラットな口調で振り向く。「また、自殺ですか？」目をむいてたずねる。ドクターはゆっくりとソファに腰を落とすと話し始めた。「ご安心ください、今日は先生にお願いがあってお呼びしたのです。以前、お話しした患者のこと覚えておられますか？彼女に先生の話をしたところ、授業を受けていたみたいで、会いたいと本人が言うものでお呼びしたしだいです」ドクターは笑顔で拓也を見つめる。

「それは良かった」拓也はドクターの正面に腰掛けると目を細めて笑顔を作った。「やっと、心を開くようになりましたが、まだ心は不安定です。これから少しずつ現実に戻さなければなりません。彼女を患者としてみるのではなく、一人の生徒として彼女と接してください」ドクターは患者の両親に話すかのように丁寧に説明した。「わかりました」拓也はゆっくり頷く。

「早速ですが、三人で会食をしたいのですが、今日のご都合は？」少し身を乗り出す。「もちろん、OKです。楽しい会話ができるといいですね」拓也はにっこり笑顔を作る。「名前は千葉佳織。3回生です。2回生のときに数学をとっていました。それでは、佳織を呼んでみます」ドクターが席を立つと、拓也は廊下で待つことにした。10分ほどすると、ゴルフウェアにグリーンのジャケットを着たドクターがゆっくりと拓也に向かってきた。ドクターの後ろからは、かなりやつれた少女が彼に隠れるように静かに歩いてきた。

「先生、覚えている？」拓也は彼女の顔を覚えてないが、笑顔を作って子供に話すように声をかけた。「はい！」佳織は笑顔で応える。三人は玄関まで行くと、赤のキャデラックセビルが待っていた。すでに予約していたレストランに到着するとすばやく燕尾服のボーイがやってきた。ボーイは佳織をエスコートしながら三人をテーブルへと案内した。

三人が窓際の禁煙テーブルに案内されると拓也は佳織の正面に腰掛けた。「佳織さん」拓也は優しい声でメニューを見せる。佳織はメニューに目を向けず「先生と同じでいいです」と心細い声でつぶやいた。「ドクター、スペシャルコースということで」ドクターの確認を取ると、「佳織さん、夏休みだね、彼氏とデートしなくっちゃ」佳織は正面左のドクターをじっと見ている。

「ドクター、海水浴ぐらいはいいだろ～」ドクターの顔を伺う。「う～ん、両親とであれば」ドクターはしばらく考えて返事した。「いやです」佳織は猫のような細い目でドクターを睨んだ。拓也は小さいがきつい口調に驚き、精神状態が普通でないことに気がついた。拓也は笑顔を作ると、「そうだ、京都に一人娘がいてね。テニスをやっているんだ。佳恵って言うんだけど、おっちょこちょいで、クロンボで、甘えん坊で、こんなの」拓也はおどけて見せた。

「ハハハ・・・私も高校までテニスやっていました」拓也は佳織と気持ちが通じ合えたようで少しほっとした。「それはいい、京都,奈良に遊びに行くか」拓也は佳織の笑顔を見るとウキウキしてきた。「ステキ！」佳織は白い歯を輝かせた。ドクターはさっきから話を黙って聞いている。彼女を危険な状態にできないからであった。目を離せば自殺の危険性があるだけでなく、教団に拉致されることも考えられたからだ。

ドクターはコロンダ刑事に尾行させることを思いつき承諾することにした。「先生の都合は？」静かに訊ねた。「え、ああ、本当のこと言うと、来週、京都に向かう予定だったんだよ」ドクターの承諾を確認した拓也は佳織の気持ちを引き寄せた。佳織は目を輝かせると「早く会ってみたいわ、佳恵さんに」と拓也に言葉を返した。「善は急げというから、月曜日、出立というのはどうだろう」佳織の気持ちが逃げないうちにすばやくドクターの承諾を求めた。

ドクターは小旅行が効果的な治療法であることを両親に話した。拓也は出立日の変更と紹介したい佳織の件を即座に佳恵にメールした。拓也は佳織から決して眼を離さないこと、教団について質問しないことを強く約束させられた。

京都への旅

拓也は8月11日(月)出発当日、朝7時に病院に佳織を迎えに行った。両親は広いロビーの左隅に静かに立っていたが、佳織は両親を避けるように、一人玄関の外に立っていた。「おはよう、佳織」拓也は学生のように元気に挨拶した。「おはようございます」普通の学生と変わらない明るい佳織の声が響いた。拓也は駆け足で両親に挨拶にいくと、母親だけが口を開いた。「よろしくお願いします」母親は丁寧に頭を下げた。「娘も佳織さんに会えるのを喜んでいます。それでは行ってまいります」二人と握手を交わすと、佳織が待っているタクシーに飛びこんだ。この旅行で現実のすばらしさを知ってくれることと佳恵との出会いが未来への第一歩になってくれることを願って東京駅に向かった。

窓際の指定席に着くと佳織は自分の空間を手に入れた満足感で、遠足に向かう子供の笑顔を見せた。佳織は流れる風景をぼんやり眺めている。拓也の視線を感じ取ったのか、小さな声で窓に向かって話し始めた。「先生、ドクターって偉いんでしょう。世界的にも有名なんですよ」真っ青な空を見つめて独り言を言った。「ああ」拓也は話しかけてくれたことに驚き即座に答えた。

「どうして、こんなガンマーランクの大学にいるの？先生も？」佳織は自分の学歴のことを気にしている。「ハハハ・・・どうしてだろうね。確かに、最下位のランクだけど、学問にアルファもガンマーも無いと思うんだが」拓也は軽く受け流す。「え！そうー」佳織は予想外の返答に驚いた。「だけど、先生もできの悪い学生相手はうんざりでしょ」拓也に振り向くと顔を近づける。

「そんなことは無いよ。佳織さん、高校は何処だったの？」佳織は黙っていた。「軽蔑されるから言えないわ」また、窓から遠くの景色を眺め始めた。拓也は佳織を怒らせたと思いつの言葉が出てこなかった。二人はしばらく窓の外を眺めていた。このまま怒らせては取り返しのつかないことになるのではないかと思い、勇気を出して口火を切った。「軽蔑しないよ」拓也は会話を続けた。「ヒルベルト大付属」佳織は消えるような声でささやいた。

「え！アーベル大に100名合格する、あの名門！君こそどうして？」田舎育ちの拓也にとって雲の上の高校であった。「ほら、軽蔑したじゃない」佳織はすばやく振り向くとほほを膨らませた。「いや、まあ、失言でした」拓也は自分の愚かさがいやになった。もうだめだと思い、黙って下を向いてしまった。再び、二人の間に沈黙の時間が流れた。

「佳織、思うんだけど、馬鹿でいいの。エリートじゃなくても、レールから脱線しても、いいの、親のロボットにはなりたくないの」佳織は目を閉じると寝言を言うようにゆっくりと小さな声で言った。拓也はなんと応えて言いか戸惑った。拓也は田舎で自由に育ち佳織のような悩みを持ったことが無かった。「先生は田舎者だからつまんないやつだよ」とにかく言葉をつないだ。

「先生はどんなレールを走ってきたの？」佳織はハイトーンの声でたずねた。「え！僕にはレールなんて無かったよ。夢はあったけど、宇宙の謎を解く夢！」拓也は自分の青春時代を思い出していた。「夢か！佳織には何にも無いな」佳織は黙り込んでしまった。拓也はまたしても怒らせたのではないかと気が気ではなかった。

「先生、実を言うと佳織、うそをついていたの。流産の話、うそなの。死にたくても死ねないから、ママを苦しめたくて言ったの。家出したのも、信者になったのも、母から逃げ出したかったからなの」このことはドクターにも話していなかった。佳織は拓也の優しさを感じ取っていた。佳織の初めての告白であった。佳織は自分をわかってくれる人に巡り会ったように思えて拓也の顔をじっと見つめた。

拓也は笑顔を作ると「そうだったのか、本当に、神の子を流産したと思っていたよ」拓也はうそと聞いて内心ほっとしていた。「先生、実際にいるのよ。教祖の妻は！20人以上いるはずよ。だけど、佳織はなれなかった。教祖は人間なのよ。神じゃないわ。それに・・・」佳織は自分の気持ちを伝えたい衝動にかられていた。拓也は佳織の途切れた言葉が気になったが、話を続けてくれたことに感謝した。

「人間は不完全でいいんだよ、できそこないでいいんだよ。悩んで、苦しんで、泣いて、笑って、恥かいて、それでいいんだよ」拓也はもっと会話が続くことを願った。「ママってね、他人に自慢できる、エリート人間になれって言うの。成績は一番、品行方正、常に模範生。そんな人間になんてなれっこないのに。もっとムカつくのは男の子からメールが来ると目を吊り上げたりするの。いつも監視されてるの。佳織はママのロボットじゃないわ」佳織の声は悲しげであった。

佳織の心の傷がとても深いことに気づいた。拓也は女性の心理は苦手であったが自分の気持ちを素直に話すことにした。「先生も逃げ出したくなるのが何度もあったな。スポーツ音痴だから運動会は死ぬほどいやだった。水泳もだ。まったく泳げなかったから、水泳の時間は仮病を使ってたな。それに、口下手だから女の子と話せなくて、話しかけられると逃げてたっけ。高校の合格発表の日も怖くて見にいけなかったな」拓也は学生のころを思い出しばそぼそと話した。佳織は子供のような瞳で流れる景色をじっと見つめていた。

佳織は静かに小さな声で話し始めた。「確かに逃げているの。自分を救ってくれる夢の中に。だけど、いつまで、逃げればいいのかしら」佳織は本当の悩みを見つけようとしていた。「そうだなー、おかしなもので、とことん逃げてもメビウスの輪みたいに、いつの間にか元のところに戻ってくるんだな。ほら、楽しい夢を見ていて終わらないで、このまま夢が続いてって、思ったことがあるだろ。だけど、目が覚めたとき、やはり、夢の中の自分はその自分であることに気づくんだな。夢は夢でいいじゃないか。

誰でも、夢に生きることは普通なんだ。夢があるから生きていけるのかもしれない。子供のころ、猫が苦手だね、夢で猫に追いかけられたんだ。ひたすら逃げても追いかけてくるんだ。ますます後ろを見るのが怖くなってひたすら走るんだ。だけど、いくら走っても早く走れない。疲れてくるし、怖くなるし、もうだめだと思ったとき、エイ！って思い切って振り向いたんだ。すると、猫が消えていたんだ。面白いだろー」

子供が昼寝をして、夢で笑っているかのような佳織の笑顔に、拓也はしばらく見入っていた。浜松駅の文字が目に入ったとき、甘い香りが鼻を包んだ。15歳ぐらいの少女が長い脚をこの世のすべての女性に対し自慢するかのように、大またで拓也の横を通り過ぎた。彼女は通路を挟んだ斜め前の通路側の席にポンと腰掛けた。窓際には彼女の友達と思われる髪をブロンドに染めたほぼ同じ年の少女が座っていた。

脚の長い彼女の前にはそ知らぬ顔をしたコロンダ君が眉間にしわを寄せ目をつぶって静かに座っていた。ドクターに頼まれて二人を尾行している。ドクターの友達の弟で25歳のキャリアである。この若さで警察署長の役職についている。これは経歴のためではあるが異例の出世であろう。だが、キャリアに似合わずとても優しい性格をしている。典型的な草食系で見た目はひょろとしていて、風が吹けば飛んでいきそうなほどひ弱な体格をしている。

コロンダは時々躓く彼を見てドクターがつけたあだ名である。拓也は「美のいたずら」について思う。彼はいたって品行方正だ。両手を腿の上に置き黙って座っている。偶然にも、美少女が下着が見えんばかりのレザーの超ミニスカートで男の好奇心を刺激しながら、美しい足を眼前にプレゼントしている。彼女は好意を持って「美」をプレゼントしているが彼にとってはありがた迷惑に違いない。男であれば痛いほどわかる。

少女が自分の美しいものを他人に見せたい、と思う気持ちはわかるような気もする。確かに、美しい脚は周りの人の心を清める。このように、長く、美しい脚は希少価値があり、特に男に対し多大の貢献をしている。だが、若い精力旺盛な青年にとってどれほど酷か。心臓が痛むほどだ。この手の拷問に耐えるには全理性を総動員しなければならない。

拓也はコロンダ君の役目を考えると気の毒になってきた。この旅行が終わったら食事にも誘ってねぎらうことにした。今回の役目は単なる尾行であろうが、彼が引き受けたのにはもっと他の意図があったのかもしれない。K教団と国際的人身売買地下組織BSHのとの関係についてドクターから先日話を聞いていた。佳織が予想以上に危険な状況にあるとすれば、拓也はとても重要なボディガードということになる。

息で佳織の長いまつげをくすぐると、佳織を窓際に押しやり席を立った。5分ほどして戻ってくると佳織はいなかった。周りを見渡したが姿は無かった。佳織はトイレに違いないと思い、左手で胸を抑え元の席に静かに座った。そのとき、鋭い目つきのドクターの顔が突然脳裏に浮かんだ。とても暗く長い時間に襲われた。

「先生」佳織が後ろから覗き込んだ。振り向くと佳織の笑顔があった。ほっとした拓也はほほを緩め目を閉じた。横に佳織が腰掛けるとバラの甘い香りが流れてきた。「もうすぐ、名古屋かしら」佳織は拓也に訊ねると、拓也の正面に腰掛けている婦人を一瞥した。拓也がハンカチで額の汗を拭き取ると偶然、本から目を上げた正面の婦人と目が合った。すぐに目をそらしたが、60歳半ばを過ぎたと思われる、金縁のメガネをかけた品のある和服姿の婦人が声をかけてきた。

「どちらまでですか？」婦人は本を閉じると拓也を覗き込むようにして訊ねた。見知らぬ婦人からの突然の質問にとまどったが即座に返事した。「京都までです」婦人は目を輝かせ身を乗り出してきた。「あら、私もでございますのよ。孫に会いに行きますの。娘さんと京都観光でいらっしゃるのね。お美しい娘さんでいらっしゃるわね」婦人の一方的な話にむかついたが丁寧に訂正した。「いえ、生徒です。京都で家族と合流することになっています」拓也は目を佳織に移したが婦人は話を止めなかった。

「今の若い子は派手でございますわね。女は和服が一番ですわよね」婦人の通路を挟んだ斜め前には顔に絵を描いたような奇妙な化粧をした少女が座っていた。拓也は返事をしなかったがそれでも話を止めなかった。「ところで、どこかでお目にかかったような気がしますわ。あ！思い出しましたわ。テレビだわ。ヒロシがいつも見っていた。数学の先生でいらっしゃるのね」

「はあ〜」拓也はとんでもない婦人に絡まれたと思ったがやむを得ず返事した。婦人は笑顔を作り目まで輝かせてメガネの右端を少し持ち上げた。「先生はアーベルでいらしたわね。私もアーベルですの。孫のヒロシもアーベルに行かせたいと思ってますの。そう、ヒロシは先生を尊敬してますの。よろしければ、こちらにサインいただけませんか？きっと喜びますわ」膝の上の本を開き拓也の目の前に差し出した。拓也は筆記体のローマ字でサインすると佳織の顔色をうかがった。佳織の目はつりあがっていた。

「先生、次は何処かしら？」佳織は足を組み拓也の手をしっかりと握った。それを見た婦人は目を大きくした。「名古屋・・・名古屋・・・」心地よいアナウンスが流れてきた。「もうすぐね。早く佳恵さんに会いたいわ。待ち合わせは何処なの？」佳織は少し怒った口調で睨みつけた。拓也はどのようにして急に怒り出したのかわからず硬い笑顔を作って防御した。

二人は京都駅に着くと駅のみやげ物売り場で時間をつぶすことにした。なぜか佳織は機嫌を損ねたらしく、急に笑顔を消してしまった。佳織は拓也から少しはなれて、時々拓也を一瞥するとみやげ物に目をやった。拓也はどうやって機嫌を取り戻せばいいか悩んだあげく手鏡を手にとった。「佳織、ほら、かわいい手鏡見てごらん！」佳織は鏡に映った自分の顔を見てニコッと笑った。「オヤ！オードリー・ヘプバーンが笑っているぞ」拓也はやっと思いついたほめ言葉を投げかけた。二人は3時に佳恵と合流した。佳織は佳恵と二人で京都巡りを楽しむことにした。

黄色い風船

3ヶ月の入院はようやく現実と向かい合える佳織を取り戻させた。無事退院を許された佳織は久しぶりに自分の部屋のベッドに寝転がり、京都旅行をしたときのことを思い出していた。二人は佳恵の部屋で未来について一晩中語り合った。「東京か。ええやろなー」パジャマの佳恵は窓から星を眺めていた。「私は嫌いよ。空気も、心も汚いし、うんざりだわ」シルクのナイトドレスの佳織はベッドに腰掛、駅で買った手鏡の中のすまして自分の顔をじっと見つめていた。

「ずっと東京に憧れてたんやわ。他人の芝生はよく見えるってやつやろか」佳恵は星空に向かってつぶやくと佳織の横にジャンプして座った。「私は京都に住みたいわ。ところで、佳恵さんの彼氏ってどんな人？」佳織は笑顔で訊ねた。「彼氏って言うか、なんと言うか・・・高一のとき、テニスの試合会場で知り合ってな、そいで、あいつ、ほんまにやぼったいんけど、なんとなく好きになってしもうてんな、まあいいかっと思って、やっちゃった。佳織さんは？」佳恵は誰にも話したことの無い経験を告白した。

「いないのよ、ごめんね」悲しい声で答えると佳織は目を閉じてうつむいた。佳恵は急に立ち上がると机の上に置いてあった小さな箱を取りに行った。「気に入ってくれるといいんやけど」佳恵が小箱を手渡すと佳織は即座に開いた。「ステキ！西陣織の財布。ありがとう」藤色の地に真っ赤なバラが描かれた財布を手に取りお礼を言った。佳織はバッグの中からホテルで買った赤ワインを取り出した。

「佳恵さん、今夜は飲み明かしましょ。二人の未来に乾杯よ」佳恵は将来は世界各国を飛びまわり、テニス、ゴルフを取材するスポーツジャーナリストになる夢を語った。まだ、現実を見つめることができない佳織は卒業までに決めると誓った。そのときの情景が鮮明に映画を見るように佳織の脳裏に広がっていた。

拓也は何度と無く佳織の安否を気遣い見舞いに行った。3ヶ月の期間は佳織の傷ついた心に拓也の優しさがゆっくりと深くしみ込むには十分であった。佳織にとって男性からの初めての優しさであった。京都旅行のとき今までに経験したことの無い男性への感情を抱いたことを佳織はやっと気づいた。自宅療養をしている間でも佳織の心には拓也の優しい瞳がいつもあった。

ベッドで目をつぶると、”これは恋じゃないよ”ともう一人の佳織がささやく。佳織は初めての男性への気持ちにとまどっていた。拓也を好きになっている自分に気づいていたが、この気持ちをどの方向に運んでいけばいいのか誰かに教えてもらいたい衝動に駆られていた。佳織は拓也の献身的な優しさに感謝した。そして、大学を卒業するつもりであったが、来年の春に留学することにした。もう一人の佳織が新しい世界で現実を見つめることを勧めたからだ。

一方、拓也は佳織の涙を見るたびにふるさとを思い出していた。今でも山奥で病弱な身体で畑を耕している育ての親である老人の姿と、5人しかいなかった古びて小さな分校がたびたび目に浮かんだ。佳織が退院するとき拓也は決意した。ふるさとに帰り分校の先生になることを。

9時に到着した拓也は空港をとぼとぼと散策した。待ち合わせの時間までまだ1時間あった。空港の中心に新しくイベント会場が設けられていた。長い垂れ幕には”世界のゲームを楽しもう！”と青地に金色の文字で書かれてあった。すでに多くの子供たちが集まっていた。拓也もゲームをする子供たちに混じって大声を上げていた。

「センセー！」佳織は長い髪をなびかせ人ごみの中から手を振って走ってきた。拓也は会場から手を振ると笑顔で佳織を迎えた。「先生って、子供ね」佳織は子供のような拓也が好きだった。「出発の時間までたっぷりあるな。食事でもしよう。ここがいい。何でも食べていいぞ。最後のデートだからな」佳織の背中を押して中に入った。「え、最後の！なんだか、いつもの先生じゃないみたい。どうかしたの？」佳織は窓際の席に着くとピザとアップルジュースをたのんだ。

「先生、なぜ目をそらすの？行くの止めようかな」佳織は拓也の表情に暗い影を感じた。「佳織、頑張るんだぞ」拓也は一切れのピザを佳織の口元に運んだ。佳織は大きな口をあけてぱくりと食べたが、いつもと違うハリの無い声に佳織は不安になった。「先生、もしかして、さよならを言いに来たの？そうなのね、どこか佳織の知らないところに行ってしまうんだわ」佳織の瞳が潤んできた。

「馬鹿だなー、ほら」ハンカチを取り出すと佳織のほほにあてた。佳織を乗せたスペースライト555は一瞬にして消えた。拓也は心の底で別れを告げた。「おじちゃん」拓也のところに黄色い風船を手にした5歳ぐらいの女の子が膝を高く上げながら勢いよく駆け寄ってきた。

「持ってて、手を離しちゃだめだよ」女の子は急いでトイレにかけていった。屋外のイベント広場の入口には多くの子供たちがひしめき合っていた。

1歳ぐらいのヨチヨチ歩きの坊やが入口にやってきた。そのとき後ろから男の子が坊やを倒して駆けて行った。「あ！」拓也は坊やに小走りに駆け寄った。すると、お姉ちゃんらしき女の子が走ってやってきて、泣き声を上げた坊やを抱きかかえるとあやし始めた。「おじちゃん、風船は？」トイレから戻った女の子はきょとんとして拓也の顔を見上げていた。拓也の左手には黄色い風船は無かった。

「あ、お空にあげちゃった、ごめんね」拓也は真っ青の空を見上げた。そこには小さな黄色い風船が懸命に空に向かって駆け上がっていた。「きっと、お空さん、喜んでるね、おじちゃん」ニコッと笑った女の子は全速力で会場にかけていった。

幻の恋

<http://p.booklog.jp/book/43704>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43704>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43704>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.